

若獅子旗に出場

松浦なぎなたクラブが3月22、23日の2日間、福岡市で開催された第25回若獅子旗西日本なぎなた大会（九州なぎなた連盟など主催）に出場しました。

同クラブは、なぎなた競技の普及と技術向上を目的に一昨年7月、松浦なぎなた協会の運営で結成されました。

この日は、同クラブの小学生8人、中学生2人が参加し、日ごろの稽古の成果を発揮して熱戦を繰り広げました。中でも萩原千春さん（志佐・赤木）が中

学生の個人試合に出場し、4回戦まで進みました。



松浦市は平成26長崎国体「なぎなた競技」の開催地

久保智里さん

青年海外協力隊派遣を報告

独立行政法人国際協力機構（JICA）の青年海外協力隊員として派遣される市職員の久保智里さんが3月27日、市長に派遣の報告を行いました。

松浦市職員から初めての同協力隊派遣となる久保さんは、平成11年度から現在まで松浦市立図書館に勤務。同図書館で学んだ知識や経験を海外で生かし、人としての視野を広げたいと同協力隊派遣に応募したものです。6月下旬からタンザニアのイリング州立図書館に司書として派遣され、約2年間、データベース化や職員の資質向上の手助けを行います。

久保さんは「司書は、争いや貧困を解決するための知識を与えたり、人の味方となってくれたりする本の良さを伝える大切な仕事です。帰国後は派遣で得た経験や知識を市の業務に生かしたいです」と話していました。



松浦の民話「7頭半のしか」

琵琶と祈祷で慰霊

志佐町上野地区（友廣忠孝区長）の伝統行事「時取様」が4月6日、栢木免山頂の法師の墓で行われました。

「時取様」は、松浦の民話「七頭半のしか」として伝えられており、志佐城の殿様に手打ちにされて埋葬された法師を慰霊するものです。その墓がある地名「時取」にちなんで「時取様」と呼ばれています。

この日は、地区住民が用意した赤飯や鯛などを供え、東光院（江迎町）の大石良敬住職が祈祷と琵琶を弾いて、法師の霊を慰めました。



「7頭半のしか」のあらすじ

むかし、日本の武士が争っていたころ、志佐城の殿様と同行して鹿狩りに出かけた法師が、7頭半の獲物が捕れると占いました。殿様は半分の鹿がいるものかと怒って法師を手打ちにし、石盛山に埋葬。ところが、狩りの終わりごろ、最後の1頭をしとめた場所がちょうど佐賀の国の殿様の領土で、その場にいた佐賀国境の見張り役と話し合って半分にすることとなり、結局獲物は7頭半となりました。

その後殿様は、法師の霊にうなされたため、慰霊のため法師の遺言どおりに法師の故郷である平戸が見える栢木免山頂に墓（右写真）を移しました。それからは、何も起こらなくなり、志佐城も長く栄えたということです。



わたしたちの郷土

28 巻

弥生時代の長崎県

壱岐市芦辺町と石田町にまたがる「深江田原」と呼ばれる長崎県第2の平野があり、この平野の中に「原の辻遺跡」があります。原の辻遺跡は、平成5年に始まった本格的な発掘調査により、吉野ヶ里遺跡をこえるほどの大きな環濠^{かんわう}が発見され、全国的にも知られるようになりしました。遺跡は、南北750^{メートル}・東西350^{メートル}の楕円形の台地を囲むように三重の濠^{ほり}を巡らした弥生時代前期から後期(2100～1700年前頃)にかけての環濠集落であることがわかってきました。環濠は、敵を防ぐためだけでなく、水をたたえて農業用水としても活用していたと考えられています。この濠からは稲作に使われていたと思われる鍬・鎌・斧・石包丁などが出土しています。

原の辻遺跡は、中国の歴史書「魏志倭人伝」に「二大^{ふたたい}国」(一支^{いっしき}国の誤記)として、登場する30余りの国々の中でも名前がはつきりした国(王都)が初めて姿を現したことになります。

平成8年には、大陸との交易の拠点である国内最古の船着き場跡が発見され、非常に高い土木技術を持っていたこともわかってきたことから平成9年9月に国の史跡に指定されています。

県内では、このほか注目すべき遺跡として、平戸市田平町の里田原遺跡があります。ここでは、早くから本格的な稲作が行われており、里田原の弥生人は木工技術に大変すぐれ、多くの木製農具を作っていたことがわかっています。

海と山の多い長崎県では、弥生時代に農耕が行われたのは原の辻・里田原、栢ノ木・今福(松浦市)など一部に限られ、他の多くの所では交易や漁によって暮らしを支えていたようです。



▲整備が進む原の辻遺跡(平成18年度原の辻遺跡調査事務所要覧より)



コラム

グラント先生
(アメリカ出身)

Headed for Warmer Weather 暖かい気候に向かって

学校の春休み期間中、私も休暇を取り、日本よりも暖かいところに向かいました。バックパック(大きなリュックサック)と2冊の旅行本、そしてカメラを持って、福岡からタイ北部のチェンマイまで飛行機で行き、2週間半にわたってタイとラオスを旅行しました。予約していたのは最初の夜の宿泊先と帰りの飛行機だけで、ほかは気の向くままの一人旅でした。

チェンマイでは2日間過ごし、市街地を見た後、ジャングルで象に乗ったり、竹製のいかだに乗って川を下ったりしました。それから、丘に住む部族の村を訪れ、ラオスとの国境へと向かいました。

ラオスでは2日間かけてボートでメコン川を下り、世界遺産に登録されているルアンプラバンのまちを訪れました。そこからとても古いバスに乗って、田舎の小さい町に着き、首都のビエンチャンで数日を過ごしました。ラオスは友好的な人々が住むとても美しい国でした。食べ物は、すべてが新鮮で、スパイスがきいていてとてもおいしいものでした。タイもそうでしたが、自然の美しさにあふれ、森と山と川が寺院や他の建物と融合していました。

この旅行は、忘れられない旅行となりました。旅行はいつも楽しくて、短く感じますが、日本に帰ることは悲しくなかったです。なぜなら、世界で大好きな景色の一つである満開の桜が私を迎えてくれたからです。

